

弘前で冒険する



事業対象地域 青森県弘前市土手町地区

受託機関 合同会社 tecolLLC

1

事業内容

実施目的

青森県弘前市の中心に位置する吉井酒造煉瓦倉庫 (YBB) を、「商店街」の新しいモデルとしてとらえ、YBB から新しい美と価値の発信を行う。また、地域の暮らしを考え、新たなにぎわいを創出し、地域の活動の場としても YBB を活用することを目的とする。

実施期間

平成 22 年 8 月 12 日 → 平成 23 年 2 月 21 日

スケジュール	2010年					2011年		
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	●本案件実施場所の整備→既に開始/水回り整備済							
	●吉井酒造煉瓦倉庫にて活動開始							
			●店舗/倉庫内整備→平成 23 年 6 月開店メド					
				●スクール告知開始				
						●YBB アートセンター スクール事業実施		

実施内容

対象地域の状況の把握

弘前市は、西は「岩木山」、東を「白神山地」に囲まれた盆地。弘前城を中心に津軽十萬石の城下町として栄え、寺院や武家屋敷、商家が軒を連ねる伝統的建造物群等で構成されている。

事業計画と事業内容の提案、目標の設定

YBB に、tecoLLC と信頼できる協働者がともに入居して計画を立案。一過性ではなく日常的にこの場所に人がいて活動を続け、新たなにぎわいを創出する地域の活動の場としたい。

実施体制

団体名	役割・得意分野など
tecoLLC	YBB 運営共同体の主体、準備事務所設置、会場整備、イベント企画・実施

2

育成計画実施における状況

人が生きていくことや地域での暮らしを考え、新しい美と価値への冒険をいとわずに創造していく…YBBプロジェクトに掲げた「美と冒険」の中心的な課題は「アート」。狭義の美術、芸術という解釈にとらわれず、自由・柔軟な発想で取り組む姿勢、と位置づけた。

事業実施の背景

YBBに「YBBアートセンター準備室」を設置し、オープンカフェやギャラリー、ショップ、マルシェや会社オフィス、コミュニティシネマなどを新設し、弘前市内の「新たな観光資源」「商いの場」として機能させたいと考えた。



煉瓦倉庫YBB

まちづくりの方向性

YBBの活動に必要なのは美と冒険であり、その中心的なコンセプトが「アート」。美術や芸術の枠を超えて、すべてを自由な発想と視点で柔軟にとらえていくものとして考える。YBBが「学校のような、こどもたちの遊び場のような、美術館のような、カフェやショップのような、スタジオ、劇場のような、市場のような場所」をめざすことで、都市計画、幹線道路が商店街としての機能を衰退させ、空き店舗も目立つようになってきた土手町商店街の活性化に生かしたい。



コンセプトの整理 1 セミナー出店と人集め

ここには志をもった人々が集う。学びたい、何かをしたい人々のつながりは、信頼や友情と結びつく。アートやデザイン、職人、料理人、医者、教師、経営者さまざまな達人が講師としてプログラムをつくり、全国から創造的な人材を講師や生徒としてここに集める。

コンセプトの整理 2 コミュニティとしてのカフェ

飲み、食べながら話すことからアイデアは生まれる。そのアイデアは、カフェのレシピやインテリアへと豊かに広がっていく。自宅でも会社でもない、人が集まる場所。そうした場所を作りたい。

コンセプトの整理 3 地場産業ショップ

「木工おもちゃ」の制作／販売など、地域の資源を有効活用して生み出された商品を販売するアンテナショップを開設する。展示するモノの「物語」を伝えられるようなワークショップや講演会を頻繁に開催する。



3

目標に対する成果（定量・定性面を含む）

YBB プロジェクトを本格的にスタートする準備事務所の設置を第一期とし、以降、セミナーの企画・準備、開催まで順調に進んだ。事業が進む過程で、商店街の既存店舗の後継者を公募し、YBB アートセンターとして2人を採用するという成果もあげた。

第一期 整備準備事務所開設

平成22年7月～8月末、YBBに事業の運営主体となる teco LLC が入居。平成23年6月の開館に向けて準備事務所を設置した。

1階に事務所、1階ギャラリーエリアへの照明機材の配置、倉庫外にトイレを整備。照明整備により、小規模展覧会やイベント等を適宜企画開催し、運営のテストとするとともに、入場収入等による財源確保をめざした。

第二期 協働スタジオ整備

その後平成22年9月～平成23年2月末には、1階のオープンスペースを準備室、アトリエとして整備した。また、オープンスペースをスクール事業にも活用するため、家具の運び入れ、音響の整備、照明の整備を行った。

12月からは雪の季節を迎え、大掛かりな屋内外の改装ができなかった。3～4月には改装・プランニング対象ゾーンを決めたうえで「カフェ」「マルシェ（農作物マーケット）」を実施・運営する仕組みづくりを急ぐことにした。



協働できる商店主の募集

地元の人材ネットワークを活用して、YBBでの新規出店者、商店街の再生を考えている既存店舗の後継者を公募し、YBB アートセンター内に設ける「カフェ」「マルシェ」の企画担当、店長候補として2名の採用・雇用につながった。

また、協働先の土手町商店街にも新規商店主が出店できるようにフォローを行い、担い手の発掘を引き続き行っていく。

[募集業種] 農産加工品の製造・販売、ギャラリー学芸員、ショップスタッフ、デザイナー、生活雑貨や伝統工芸品、新製品などの製造・販売、アトリエスタッフ

セミナーの開催

食・農業・メディア・アート・観光・学校の各分野で、地方における新しい価値創造を行っている7名をゲストに招いて「YBB アートセンターの夜明け～鼓動～」と題した4回のセミナーを開催。土手町商店街店主、弘前市民のほか青森市、十和田市、黒石市、平川市の人たちを含め、合計97名が参加するセミナーとなった。

[YBB アートセンターの夜明け～鼓動～]

- ・1月27日 「新しいメディアの夜明け」
赤星豊さん、草薨洋平さん
- ・2月7日 「農と教育のパラダイムシフト」
ジョン・ムーアさん、林篤志さん
- ・2月9日 「アートはビジネスへ」
山出淳也さん、田島怜子さん
- ・2月12日 「伝統工芸品、商品開発、その前に」
山田遊さん

「YBB アートセンターの夜明け～鼓動～」セミナーの開催

YBB スクール 1月27日

地方発、新しいメディアの夜明け

赤星豊さん (kアジアンビーハイブ代表) × 草薙洋平さん (東京ビストル代表)

エリア媒体に地域というキーワードはすでにない…草薙さんが全国のフリーペーパーを紹介し、始まった。地元企業とのタイアップで記事・広告制作を続ける赤星さんからは、「その誌面を作り上げる編集長など作り手の人がとても重要」との指摘。情報を何かに特化して発信する重要性を学んだ。



受講生を大いに刺激した赤星さん(左右)と草薙さん(左右)。

YBB スクール 2月7日

農と教育のパラダイムシフト

ジョン・ムーアさん×林篤志さん (john moore associates.)

教育を媒介としたコミュニケーションの場づくり、その土地が持つ特性をプロデュースしている二人。事例に挙げたのは、東京の自由大学、新潟の限界集落と高知の山間のプロジェクト。「普段生きている中で巡り会うことのない人と人を繋いで、そこから新しいものを生み出していくこと」の重要性がひしひしと伝わってきた。



YBBの取り組みに「未来はわからないが、何でもやってみよう」とジョン・ムーアさん(右)。

YBB スクール 2月9日

アートはビジネスへ

山出淳也さん (NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事)

日本一の温泉街であり、留学生の数も日本一の大分県別府。公共温泉に併設する公民館での観光客と地元民の交流を“温泉一裸一むき出しのころー自由=アート”と紹介。“ある場所”を多くの人々が共有するためにアートという価値観は有効であり、人と人がつながっていく可能性を誘発する要件であることを学んだ。



商店街、街全体にどうやって利益を還元させていくか。この考え方がいま、街ぐるみのアートプロジェクトに必要な視点・運動であると気づかせてくれた山出さん。

YBB スクール 2月12日

伝統工芸品、商品開発その前に

山田遊さん (method. 代表)

クリエイティブ・バイヤーの山田さんは、メーカーから発売日などの商品情報をいち早くチェックして、取り扱う商品をふくめた全ての情報を元に小売店のために品揃えするのが仕事。売れる商品開発に欠かせない視点や買い手が商品に対価としてお金を払うということが、いかに重要で基本的なことであるかを知った。

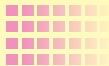


世の中には、視点をちょっと変えるだけで売れるものがたくさんある。そのちょっとのために売れなくなるのはもったいないですよ…山田さんの語りかけに受講した人は納得の表情だった。

4

支援協力機関が事業に果たした役割

セミナー実施に欠かせなかった土手町商店街の協力。各回を通じて青森市や十和田市、黒石市、平川市からも参加者を集めた。「新たな店主＝シャッターを開けることではない」という手ごたえを、YBB プロジェクトにかかわった全員が共有した。



対象地域、商店街へのヒアリング

弘前下土手町商店街振興組合
事務局長 宮川克己さん

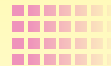
宮川さんには、1月27日開催の第1回セミナーにオブザーバーとして参加していただいた。宮川さん自身、土手町商店街に限らず、弘前市を中心とした観光冊子を発行しており、私たちYBBプロジェクトに期待するとともに、YBBをどういう場所にしていくのかを理解していただいた。

「YBBが行うことを、商店街に早い段階でオープンしていただけると、オープンまでの間も連動して告知ができるし、なにより商店街とタイアップして企画、商品開発を進めて行くことができる」という要望をいただいた。

弘前中土手町商店街振興組合
専務理事 平山幸一さん

平山さんからは「YBBスクールという形態自体、弘前市にも商店街にもなかったケースである。今まではどちらかというイベント的な要素が強く、一時的な集客という点ではありがたいが、今回のさまざまな取り組みのように、コミュニティを持続して作る仕組みはこれからの商店街に欠かせない」と、一定の評価をいただいた。

一方で、今回の講義内容には「ドラスティックだ」という意見もあった。「YBBスクールは既存のスクール（カルチャースクール、商店街活性化のたぐいのもの）とは一線を画したいが、徐々に実践的な要素をふまえ、既存の店主にも気づきを与える講座や仕掛けを今後も継続したい。YBBという場所だけではなく、商店街の空き店舗を有効活用したスクールや仕掛けもお願いしたい」と言葉をいただいた。



まとめ

平成23年6月にオープン予定の「YBBアートセンター」において、とても有意義なプログラムが展開できたと自負している。

tecoLLC. が得意とする「アート」「デザイン」という部分を補ってくださった個性的な講師を招き、講義から新たな価値観をスタッフほか参加者に注入できたことが、一定の評価につながった。「もっと聞きたい」「もっと踏み込みたい」という声が出てきたのは非常にありがたい。スクール事業としての継続と、より具体的・実践的な講座を連続して開催したいと思っている。

新たな店主としては、この事業年度中に2名を採用。実際に「開館準備スタッフ」として、商店街の事前調査や全体企画、運営にまつわる事業計画づくりが始まった。冬季期間は残念ながら、オープンにまつわる外装などを含んだ工事には踏み込めなかったが、3月以降は「カフェ」「ショップ」「マルシェ」を重点項目と位置づけ、新たな人材の確保、什器や店舗内装・設備の準備、具体的な商品ラインナップ、オープンへの告知ツールの作成などがスタートしていった。

「新たな店主」とは、決してシャッターを開けることがゴールではない。商店街も「いま、地域の人々にとって、必要な機能を持つこと」に特化すれば、必ずしも小売店である必要性がない。また、小売店にこだわるのであれば、商品や売り方をもっと積極的に考えていく必要があるだろう。そうした意味で考えると、この教育プログラムは新しいきっかけを生んでいるという成果につながっていると感じた。

5

地域、商店街が活性化に向けて果たした役割・活動の報告

YBB プロジェクト事業の期間中、対象地域とその周辺商店街の方々に「プレスリリース」という形でチラシ配布ポイントを設置。約 30 カ所へのチラシ配布・補充には、のべ 60 名ほどの受講生にも参加・協力をいただいた。

YBB アートセンターの開館準備にあたっては事前準備に時間を費やしたことにより、周囲への告知は思うように進んでいない。今後は商店街との連携、協力をあおぎ、より協力体制を敷いていきたいと考えている。

6

新たな課題とその対策について

事業を通じ、日増しに YBB を含む周辺商店街の関係者の期待の高まりを、いろいろな場面で実感してきた。tecoLLC も、期待感をもって YBB アートセンターの開館に向けて活動を続けている。

 課題

この教育プログラムを進めるにあたり、人物によって「ゴールの尺度」が異なるために「どの時点で商店主となりうるか」という判断が難しく感じた。店を開けることがゴールなのか。開店から3年後がゴールなのか。

アートプロジェクトの手法は一定の評価として受け入れられる一方、どのように商店街と共存し、継続させ、ビジネスにしていくのかという部分にもつと時間を割きたいということが課題となる。

 対策

一定のトライアル（出店／雇用を含む）では受講者に意識の高い人たちが多く、その受け皿となる場所の目処があれば、受け入れやすい。また、2年、3年と継続性を持った支援が得られるシステムであればさらに有意義なプログラムであると思う。事業継続が認められれば、tecoLLC は引き続き手を挙げたい。

連携および
参加機関

- 下土手町商店街振興組合
- 中土手町商店街振興組合